

資 料

幼児と高齢者の世代間交流における ヘルスケアシステムの可能性の検討 —文献レビューによる—

Examination of the Potential of the Health Care System in Intergenerational
Exchange Between Infants and the Elderly:

Literature Review

伊藤良子 西村めぐみ

Ryoko ITO and Megumi NISHIMURA

旭川大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：幼児，高齢者，世代間交流，ヘルスケアシステム，地域共生社会

I. はじめに

世代間交流の必要性については、1960年代半ばにアメリカの研究者らにより指摘され、世代間交流のプログラムが登場したといわれている。日本における世代間交流は、1960年代後半から子ども世代と高齢者世代の交流を目指す活動として始められた。しかし、日本の世代間交流の多くは、プログラムという継続的なものではなく、イベントや行事という単発的なものであった¹⁾。1980年代以降では、単発イベントではなく意図的・継続的にするための「幼老複合施設」による「幼老統合ケア」の実践が展開された²⁾。そして今日では、幼児と高齢者の世代間交流のシステムとして、幼老複合施設が各地域で展開され、以下のようなメリットがいわれている。子どもには、「高齢者をいたわる気持ちの芽生え」「マナーが身につく」「幅広い知識が得られる」「子どもの情緒にも良い影響を与える」である。子どもの親にとっては、「子どものしつけに高齢者の力で助けてもらえる」「若い世代の親だけではできない子育てを担ってもらえる」である。高齢者では、「笑顔・活動量が増える」「生きがい」「脳の活性化への期待」である。

ヘルスケアとは、日本ヘルスケア協会の定義によると『分析の知と臨床の知との対話の下で、産業横断的に提案される価値の創造を通じて、人々が「よく生き

ること (well-being)」をめざし、個人的にも社会的にも、より少ない負担で、病気や心身の不調からの「自由」を実現し、かつ自らの「生きる力」を引き上げていくための手伝いをする諸活動である。』³⁾とされている。ヘルスケアシステムとは、保健や医療における情報化施策の経緯と現状について知り、効果的かつ、質の保証された高度なヘルスケア（保健・医療・福祉）サービスを提供するための情報技術の必要性や活用方法のことである。

各地の幼老複合施設で展開されている幼児と高齢者の世代間交流でのメリットは、ヘルスケアの定義でいわれている『人々が「よく生きること (well-being)」をめざすこと』と『自らの「生きる力」を引き上げていくこと』となっていると考える。また幼児と高齢者の世代間交流は、2016年6月に閣議決定された厚生労働省が掲げるビジョン「日本一億総活躍プラン」の内容に盛り込まれた地域共生社会の実現の一翼ともなっている。

そこで今回は、幼児と高齢者の世代間交流に焦点をあてたヘルスケアシステムの可能性を検討するための文献レビューを行った。

II. 研究目的

文献レビューにより、幼児と高齢者の世代間交流におけるヘルスケアシステムの可能性について示唆を得ることである。

Ⅲ. 方 法

1. 対象文献の選定

「幼児 and 高齢者 and 世代間交流」をキーワードとし、2022年4月に検索した。2000年から2022年4月までのCiNiiによる26件と医中誌webによる33件から、重複のもの、会議録、児童や中学生を対象としたものを除き、論文として入手可能なもの9件を研究の最終分析対象とした。

2. 分析方法

選定論文内容の結果から、幼児と高齢者の世代間交流における「成果」と「課題」について研究者2名にて整理し、ヘルスケアシステムの可能性について検討した。

Ⅳ. 結 果

1. 文献の概要

分析対象とした論文は表1に示す通りである。研究方法は、質的研究が2文献、量的研究が2文献、ミックスメソッドが3文献、レビューが2文献であった。

2. 幼児と高齢者の世代間交流における「成果」と「課題」

成果と課題を表2に示す。

1) 成果について

成果として、これまでもいわれていた世代間交流のメリットと同様の以下が抽出された。

幼児へのメリットとして①「幼児の他者への思いや

り、コミュニケーションスキルの発達」②「高齢者のゆったりとした生活リズムに触れることで、幼児には親とは違った安堵感」③「幼児の保護者と保育者から知育と徳育に有効な取り組みとして認識」の3つが抽出された。高齢者へのメリットとして①「高齢者の行動や心理状態の安定」②「障害のためコミュニケーションがとれない高齢者にとって幼児との交流は楽しみ」③「高齢者の生活の質向上」の3つが抽出された。幼児と高齢者の両者にとっては「幼児と高齢者の親和性が高まる」であった。職員と高齢者双方のメリットとして①「職員が世代間交流プログラム研修と継続的な支援を受けることは、高齢者と職員双方へのプラスの影響」②「プログラム浸透を図ることで、職員の負担感軽減と高齢者の生活の質向上」の2つが抽出された。

地域にとって「世代間交流プログラムはwell-beingの向上と地域づくりに有用」であった。

2) 課題について

課題として、幼児と高齢者の双方では、「対象の年齢やニーズにより目的を明確化し、両世代に共通するアウトカムを中心においたプログラム開発ならびに理論に基づく方法論の確立」の必要性、「交流の際に保育と介護という2つの視点を踏まえ、世代間交流を企画する保育者や介護者などの三世代の交流として捉える」であった。そして高齢者から捉えたものは、「高齢者の状況により交流内容が変化するため高齢者の状況別に世代間交流を捉える」「高齢者の認知症症状やADL、園児に対する意識を考慮する」があった。

表1 対象文献一覧

No	発表年	著者	タイトル	収載誌
1	2021	徳田多佳子 請川 滋大	幼児と高齢者の世代間交流にみる保育者の意識変容	日本女子大学大学院紀要 27 165-173
2	2020	徳田多佳子 請川 滋大	保育における幼児と高齢者の世代間交流－幼稚園の保護者・保育者に対する調査から－	日本女子大学大学院紀要 26 149-157
3	2020	六角 僚子 種市ひろみ	幼老共生施設における継続的世代間交流プログラム介入における効果	三重県立看護大学紀要 24 13-18
4	2017	村山 陽 竹内 瑠美 他	幼老複合施設における世代間交流の可能性と課題	老年社会科学 38 (4) 427-436
5	2012	金森 由華	高齢者と子どもの世代間交流－交流内容を中心に－	愛知淑徳大学論集 (2) 69-77
6	2012	糸井 和佳 亀井 智子 他	地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果－文献レビュー－	日本地域看護学会誌 15 (1) 33-44
7	2007	上村 眞生 岡花折一郎 他	世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究	幼年教育研究年報 29 65-71
8	2005	土永 典明 岡崎 利治	世代間交流に関する調査研究－高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から－	九州保健福祉大学研究紀要 6 27-34
9	2004	渡辺 優子	幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点	新潟青陵大学短期大学部研究報告 (34) 15-24

表 2 対象文献の成果と課題

著者（発行年）テーマ	成 果	課 題
1 徳田, 他 (2021) 幼児と高齢者の世代間交流にみる保育者の意識変容	保育者の成育歴における高齢者との親密度が世代間交流への抵抗感の程度と関連していること、保育者は不安と戸惑いの中で改善を模索し、教育効果の気づきを得ること、その後は能動的に交流に関わりより良い実践を求めるモチベーションが正のループとなることが明らかになった	保育者に対して高齢者についての知識・理解を含めた内容や方法の検討、及び世代間交流の有効性の向上を目指した指導法と体系的な枠組みの開発が求められる。
2 徳田, 他 (2020) 保育における幼児と高齢者の世代間交流－幼稚園の保護者・保育者に対する調査から－	保護者から知育と徳育に有効な取り組みとして認識され、「昔遊び」などの文化や伝統の維持に世代間交流の意義が認知されており、今後の期待では徳育が重要視されていた。保育者は高齢者への優しさ等の徳育に関し、世代間交流の意義を認めていることが明らかになった。	より良い世代間交流のカリキュラム構築に向けて、検討を行う際にその経験不足を補う手立てが求められ、課題として、例えば保育者養成や保育者になったばかりの段階で、高齢者との世代間交流についての学びやトレーニングを行うなどの検討と検証が必要である。
3 六角, 他 (2020) 幼老共生施設における継続的世代間交流プログラム介入における効果	職員が世代間交流プログラム研修と継続的な支援を受けることは、高齢者と職員双方にプラスの影響を与えると考えられ、今後、プログラム浸透を図ることで、職員の負担軽減と高齢者の生活の質向上への一助となると考える。	高齢者に対する長期間調査は加齢や合併症悪化などで一貫した評価が行えないこと、介入が北関東一か所の幼老共生施設であり、全国的なレベルでの調査が行えていない。
4 村山, 他 (2017) 幼老複合施設における世代間交流の可能性と課題	園児との自然発生的な世代間交流を通して、高齢者の行動や心理状態の安定に寄与する可能性が示唆された。	幼老複合施設における世代間交流の課題として、①施設入所高齢者の認知症症状やADL、園児に対する意識を考慮すること、②園児と高齢者の双方の安全と衛生に留意すること、③交流の際に「保育」と「介護」という2つの視点を踏まえることが示された。
5 金森 (2012) 高齢者と子どもの世代間交流－交流内容を中心に－		課題として、①幼稚園・保育所の保育でおこなう世代間交流研究の必要性、②高齢者の状況により交流内容が変化するため高齢者の状況別に世代間交流を捉える必要性、③世代間交流を企画する保育者や介護者などの三世代の交流として捉える必要性である。
6 糸井, 他 (2012) 地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果－文献レビュー－	世代間交流プログラムは well-being の向上と地域づくりに有用な方法であることが示唆された。	対象の年齢やニーズにより目的を明確化し、両世代に共通するアウトカムを中心においたプログラム開発ならびに理論に基づく方法論の確立が必要である。
7 上村, 他 (2007) 世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究	幼児にとって高齢者とかかわることは、非常に肯定的に受け止められており、高齢者との日常的な交流は、他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与していることが示唆された。また、高齢者にとっても幼児との交流は楽しみとなっていることが明らかとなった。	本研究では、高齢者の主観的健康度が幼児との世代間交流を経験することでどのような状態にあるのか、好影響は確認できなかった。
8 土永, 他 (2005) 世代間交流に関する調査研究－高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から－	交流活動をしている保育所にあつては、全体として、園児が挨拶をしたり、高齢者が親しみをもつなどの親和性が高まっているようである。園児は、高齢者のゆったりとした生活リズムに触れることで、親とは別の安堵感を味わっているようである。また、保育士もこのような地域のごく自然な交流の必要性を感じている。さらに、このように、園児や高齢者に接する場合には、事業実施に関する予備的な知識や準備等の面でもしっかりとふまえられた上で実施されることが肝要であるとしている。	高齢者がもつ生活力が子どもの成長・発達にどのようにつながるのかの検討と対応がなされなければならない。保育所が家族支援の拠点として活動していくことが重要である。
9 渡辺 (2004) 幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点	普段孫に会う機会が少ない祖父母にとって、園の行事は互いの交流の良いきっかけとなっている。障害のためにコミュニケーションが取れない高齢者が、おもちゃ図書館で子ども達と一緒にいることを楽しんでいる姿があった。	行事はともすると片方からの一方的な関わりになることも考えられる。祖父母の関心が自分の孫のみに注がれるのでは交流の目的が果たせないのではないだろうか。祖父母と別居している子ども達は、祖父母の実態がわかっていないし、面倒を見ることについても、イメージが少ない。

V. 考 察

1. 幼児期の情緒とコミュニケーションスキルの発達

現在は、女性の社会進出が進み、共働き世帯が増え、日本の子育てにおける伝統的役割分担観が変化してきている。

幼児期の情緒とそれをコントロールする力の発達や自己意識・他者感情の発達やコミュニケーションスキル等は実体験を基盤とする。しかし、21世紀を生きる子どもは、生まれた時からスマホであやされるなどインターネット社会で生活し、SNS等によるコミュニケーションが主流という人間関係で生き、人間発達が大きく変容している。そして現代的課題である「発達の脆弱さ」「未熟さ」「暴力」「いじめ」「不登校」「行動障害」などの問題を深めることが予想される。

今回の結果から世代間交流による幼児のメリットとして、「幼児の他者への思いやり」「コミュニケーションスキルの発達」「高齢者のゆったりとした生活リズムに触れることで、幼児には親とは違った安堵感」が抽出され、高齢者との世代間交流を行うことで、現代的課題を緩やかにすることが示唆される。

2. 高齢者の生きがいや健康づくり

わが国の高齢人口は増加の一途をたどり、2025年には高齢化率30%、2060年には40%に達すると予測されている。このような高齢化の影響は、家族構成にも変化をもたらし、昔ながらの大家族である三世帯帯が減り、夫婦のみの世帯や単独世帯（一人暮らし）が増えている。このような核家族化は、今後も進むことが予測されている。

高齢者にとって家族や他者との関わりは、単にコミュニケーションとしてだけでなく、健康にも影響する。それは、世代間交流が社会とのつながりを意味し、特に「コミュニケーションがとれず」家庭内で閉じこもりになりかねない「高齢者にとって幼児との交流は楽しみ」といった「心理状態の安定」の効果をもたらす。これが生きがい、健康維持、孤立予防にもつながるものであり、コミュニティの中における役割の再獲得にもつながるものである。また、未来のある幼児との関わりは、生きる意味や希望にもつながるものとする。

3. 幼児と高齢者の世代間交流におけるヘルスケアシステム開発の必要性

コミュニケーションの手段は、実際にあつて顔を見て、声を聴いて、肌に触れて、時には臭いや味まで確かめるという実感を介する自己と他者の関係性を深く

豊かにするものとする。今回の文献レビューでは、幼児とその養育者、高齢者施設利用者と職員それぞれにメリットがあることが明らかとなった。世代間交流により自己と他者の関係性を深く豊かにする人間関係が形成されると示唆される。

課題から、両者のニーズに合わせたプログラム開発と幼児と高齢者、養育者、介護者など参加者の視点を捉えた交流企画の開発が必要であることがいえる。

人間は、地域社会の生活の中で、様々な営みや経験をし、多世代間で援助しあいながら生涯発達しながら生きていく存在である。また、援助は、自助と共助の双方が必要である。地域社会の主体はあくまでも「ひと」である。その地域社会の中で今住んでいる人同士の自助と共助があるヘルスケアシステムが幸福な日常生活の実現への一翼を担うと考える。それは、家族を超えた緩やかな共同のしくみがある地域共生社会の実現でもある。

VI. 結 論

幼児と高齢者の世代間交流メリットを活かし、課題を留意したヘルスケアシステムが地域共生社会の実現に向けての一助となる。そのため、幼児と高齢者の世代間交流におけるヘルスケアシステム開発をする意義がある。今後は世代間交流のメリットを活かした、家族を超えた緩やかな共同のしくみがある地域共生社会における保健看護と福祉が融合したヘルスケアシステムの構築を目指していく必要がある。

利益相反

開示すべきCOIは存在しない。

本論文は、2022年9月に開催された日本家族看護学会第29回学術集会で発表したものに加筆・修正してまとめたものである。

引 用 文 献

- 1) 黒岩亮子：日本における世代間交流の展開，85，社会福祉第59号，2018.
- 2) 黒岩亮子：日本における世代間交流の展開，87，社会福祉第59号，2018.
- 3) 公益社団法人日本ヘルスケア協会：ヘルスケアの定義（詳細版），1，公益社団法人日本ヘルスケア協会，2015.

参 考 文 献

- 崔恩熙：理論をふまえた高齢者と子ども・若者の交流に関する研究の到達点－高齢者への効果を中心とした文献レビュー，14，1-11，日本福祉大学大学院『福祉社会開発研究』，2019.
- 角マリ子，木下陽子，福永寛恵：高齢者と子どもの世代間交流に関する文献検討，16，79-93，熊本保健科学大学研究誌，2019.
- 多湖光宗：幼老統合ケア－高齢者が輝き子どもたちの自立につながる「高齢者ケアと子育ての相乗効果」，15(2)，41-45，月刊総合ケア，：2005.
- 田中直子，齋藤泰子：世代間交流における利用者評価－高齢者と子育て世代の母親の語りから－，12，21-29，武蔵野大学看護学研究所紀要，2018.